

03R eport



GS 連続シンポジウム 2009
まちづくりへのブレークスルー このまちに生きる

第3回 2009年11月13日(金) 16:00~19:00 於：東京大学工学部1号館土木設計演習室 うつぐみの心が紡ぎだしたものの、育ててゆくもの - 沖縄 竹富島 報告レポート



GS 連続シンポジウムの第3回が、さる11月13日に開催された。場所は普段学生たちが制作活動にいそしんでいる土木設計演習室。学生たちの手作りにによって、一席限りのシンポジウムがつけられた。彼らの熱意が伝わったのか、各地から参集して頂いた講演者たちの話も大変熱のこもったものとなった。前回から引き続いたこうしたシンポジウムの形式も、だいぶかたちになってきたように思う。今回も、会場にお越し頂いた方にメッセージの執筆をお願いしたので、ぜひご覧いただきたい。

竹富島がなぜ美しいのか

シンポジウムを通して感じたことは、美しいまちなみを形成し維持することは、風土文化・人を育てることなのだと意識した。



竹富島に残る美しいまちなみにそれを支える隠れた要素があり、先人がその要素をこだわり・美学として残してきたこと。「栄えたことがない」ことが経済だけではない豊かな生き方につながり、「うつぐみの心」を地域から忘れさせなかったこと。このことにいち早く気付いて地域の将来像を見据えたまちづくり運動として行動を起こした島の人々の熱意を感じることができました。(島への愛着がゆえに起こした行動が結果的に将来像を描くことになったのかもしれません)

その結果が今の竹富島の美しい景観になっており、まさにそこにある人々の生活が溶け込んだまちなみが創出・保全されていると思いました。目に見えるもの(瓦葺や石垣など)と目に見えないもの(毎朝の清掃や祭りなど)が島の生きた景観を創り出しており、竹富島がなぜ美しいのかを深く感じさせるものでした。

大川原 雄一郎(財団法人 世田谷トラストまちづくり)



ある種の羨ましさを感じずにはいられない

うつぐみのつつましい生活が、美しい風景を生み出し、観光地としての人気を確立した竹富島。本土の都市の多くが過去の繁栄を経て行き詰まりを見せる中、“何かで栄えたことがない”この島が、明確な方向性を持って独自の生活を続けている様には、ある種の羨ましさを感じずにはいられません。根底にある色濃い島の文化やコミュニティに圧倒されると同時に、首都圏との違いに悩んでしまいが、真似できる部分やヒントは地域文化のあり方にあるのではないかと思います。貴重な機会を与えていただきありがとうございました。

鍵溝 遼治郎(株式会社オオバ)



日々の暮らしのなかでまちの風景がつくられる

まだ沖縄を訪れたことのないわたしは、率直に沖縄にいてみたいと思いました。竹富島の街並みが人工的に開発してつくられたものではなく、そこに住んでいる住民の方たちによって長年つくられてきたものだという事に心惹かれたからです。

都会の景観も設計者の方によって考えられた素敵なのところもありますが、住んでいる方たちが日々の暮らしのなかで造ってきた家の造りや外観が、時間をかけてその場所に馴染み、まちの風景をつくってきたんだと思います。だからこそ、その街並みに興味を持つ方や守ろうとする人がいるのだと思いました。今後もそんな風にしてつくられた町を多く取り上げて頂きたいと思います。

伏見早紀子(株式会社イワタ)

文責：GSデザイン会議

川添善行(東京大学助教)
zoe@keikan.t.u-tokyo.ac.jp

